

横川省三　ロシア人を感嘆させた「武士道」

<特別任務班>

横川省三といっても、今日知る人は殆どない。日露戦争時、特務班の一員として働いた民間人である。シベリア鉄道爆破に失敗、ロシア軍に捕まり銃殺刑に処せられた人物である。



横川 省三

しかしこの時の横川と同志沖禎介（ていすけ）の態度がロシア側に深い衝撃と感銘を与え、日露戦争の勝利へ少なからぬ貢献をしたのであった。この特別任務班は、ロシアの東清鉄道（ロシア帝国が満洲北部に建設した鉄道路線。満洲里からハルビンを経て綏芬河へと続く本線と、ハルビンから大連を経て旅順へと続く支線からなる。時代に合わせて中東鉄道、東支鉄道、北満鉄路あるいは北満鉄道と呼ばれていた）の線路及び鉄橋を爆破し、ロシア軍の輸送補給を妨げ、満洲における戦いを我が方に有利に導くことを目的とした特殊部隊であった。このシベリア鉄道（ロシア帝国西部に位置する首都モスクワから、ロシア東部のウラジオストクまでを繋ぐ鉄道。正確にはロシア中南部に位置するチェリャビンスク州のチェリャビンスクからシベリア南東部の沿海州にある日本海岸のウラジオストクまでの7,416kmの区間を指すが、一般的にはその他の路

線も含めたモスクワ - ウラジオストク間 9,289km を指す事が多い) は、日露戦争の始まる 2 年前の明治 35 年、約 10 年と巨費を投じた国家事業として完成されたものである。このシベリア鉄道こそ、ロシアの飽くことなきアジア侵略を尚一層推進し、これを最大の戦略的武器として活用する目的であった。

日本の参謀本部では刻々と迫り来る日露の軍事対決に備え、戦争開始の際、東清鉄道を破壊する為に特別部隊編成の計画を以前から進めていたが明治 37 年 2 月、これを実行に移したのである。特別任務は四班から成り、総勢 46 名、うち軍人 11 名、民間人 35 名、皆一死奉公を誓った勇士であり、横川は民間人の頭領株で最年長であった。



沖 禎介

<成功目前の露見>

2 月 20 日、特任班は北京で出陣式を行う。生還を期せざる出発故、彼等は水杯をかわし合ったが、その意気は天を衝くものがあつた。横川は第一班 12 名の一員として翌日夜明けと共に出発した。全員支那商人のいでたちで数頭の馬に食料と共に爆薬を積んだ。想像を超える厳しい満州の冬季、来る日も来る日も吹雪の中を歩み続け、持参の天幕を雪原に張って泊まり、乾燥した牛糞で暖をとりつつ北へ北へと進む毎日であった。

3 月 8 日、班を 2 つに分け、1 つは西北方、もう一方は横川を班長として東

北へ進む。1か月間困難な道中が続くが、4月10日夕暮れ、横川班は黒煙をたなびかせて走る列車を発見した。ついに目指す東清鉄道に至り、一同踊り上がって喜んだ。場所はハルピンより数百キロ西にあるチチハルの近くである。横川は目立たぬ所に天幕を張り、早速準備にかかり、翌朝同志4名を敵状偵察に出し、横川と沖禎介が残った。しかし喜びも柄の間、東清鉄道守備隊のロシア軍に天幕を発見され、取り囲まれた。横川と沖は即刻地図等の重要なものを隠し、二人は黄色の衣のラマ僧姿をしていたので、なにくわぬ顔をしてラマ僧で押し通そうとした。しかしそこにある「湯呑」がラマ僧使用のものでない事から疑問を持ち、ロシア連帯本部へ連行された。その後彼等の天幕から大量の爆薬が発見された。これで万事休すである。尚他の4名は後日、ロシア軍の手にかかり、あえなく戦死した。

<軍法会議>

横川と沖はハルビンに連行され、4月13日ロシア軍法会議にかけられた。問答は長くなるので省略するが概略は次の如くである。

- 二人は軍人ではないが、国の為にはどのような任務を与えられても生命を投げ出して忠を尽くす国民の一人である。
- 自分の任務や目的は述べるが、指導者の姓名は正命（いのち）に変えて言えない。
- 「軍の機密を告白するなら刑を半減してやるがどうか」の問いかけに対し、我々は日本人である。ここに武運なく捕えられたからには元より死は覚悟の上である。我等日本人にとって死生は論ずるところではない！！天皇陛下の御為、祖国の為なら女・子供まで命を惜しむ者など、只の一人も居ない。我等は如何なる極刑をも喜んで受ける。しかし日本軍の機密に関する事は断じて言わぬ。

以上の様なものであった。

<遺書>

4月17日二人は軍人でない為に法務官は絞殺刑を求刑した。横川と沖は相顧みて「莞じ」として微笑んだ、、、と言われている。横川は裁判官から最後の陳述を求められた時、軍人として扱い名誉の死刑を遂げさせて頂きたいと述べている。この時既に裁判官らは二人の烈々たる殉忠報国の精神に強く打たれていた。裁判官らは刑の最終決定者ロシア軍、総司令官アレクセイ・クロパトキン（1898年に陸軍大臣に任命されて以来宮廷武官の道を進み、事務能力に優

れた政治的手腕の高い軍人として評価される。陸軍大臣時の1903年、皇帝ニコライ2世の勅命により極東視察のため来日、日本の軍事力を高く評価、日本との軍事衝突には一貫して反対していたが、日露戦争開戦直前にロシア満州軍総司令官に任命され日本軍と直接対決する事となる。しかし実戦指揮能力や決断力・判断力に乏しく日本軍に連戦連敗し、奉天会戦に敗北した責任を取らされロシア満州軍総司令官を罷免され第1軍司令官に降格される。日露戦争後は軍中央から退き、第一次世界大戦ではロシア北部方面軍・第5軍を指揮しドイツ軍と戦うが大敗する。1916年7月、トルケスタン総督に転出し、折しも発生した1916年蜂起を武力鎮圧。その後2月革命の際に逮捕投獄されるが危険人物と見なされずにすぐに釈放され、晩年は故郷で教師として静かな余生を送る。)。に二人の助命を請願したのであった。ロシア側が如何に二人に感銘し、心を動かされていたかが分かる。しかしクロパトキンはふたりに銃殺刑を命じた。二人の堂々たる姿に心から感服し、助命嘆願を行ったチチャコフ司令官がクロパトキンに許可しない理由を問うた時、クロパトキンは次の様に答えた。

「私は日本人というものをよく知っている。日本人は志を立て任務にあたった以上、生きて帰りたいと思う民族ではない。もし釈放したところで、彼等は日本武士道の名にかけてどこかの土地で自決するだけだ。このような勇士たちを思えばこそ、武士の礼をもって処刑することこそが彼等の本懐ではないのか?」、、、、と。



アレクセイ・クロパトキン

これによって当初の「絞首刑」となっていた判決は名誉ある「銃殺刑」に変わった。ハルピン衛戍（えいじゅ）司令官ドウンタン大佐は、わざわざ独房に来たり、「何か言い遺すことはないか」と尋ねた。そこで二人は遺書を書いた

いと申し出た。横川の遺言は次の通りである。

「拝啓、父は天皇陛下の命に依り露国に來たり、4月21日ロシア兵の為に捕えられ、今彼等の手に依り銃殺せらる。是、天なり命なり。汝等幸いに身を壯健にして、尚国の為に尽くす所あれ。我死に臨んで別に言う所なし。母上は無論宜しく汝等より伝う可し。富弥（弟）にも宜しく伝う処あれ。 明治37年4月20日 満州吟爾賓 横川省三

此の手紙と共に五百両を送らんと欲したけれども、総て露国の赤十字社に寄付したり」 横川律子殿（18歳）横川勇子殿（11歳）

二人で一千両の寄付を知って驚いたチチャコフ司令官とハルピン衛戍（えいじゅ）司令官ドウンタン大佐は、ロシア兵の医療費となってしまうより、御家族に送るべきだと進めた。しかし二人は微笑みながら「我らが天皇陛下は、国の為に命を捨てた者の遺族を見捨てられることはありません。どうかロシアの傷病軍人の為に、このお金を使って下さい」と再度懇願した。これにはチチャコフ司令官も涙を流し、ドウンタン大佐も深く感じ入り、横川・沖の希望を容れた。そして二人の遺書を受け取り、「これは確かに遺族に送達します」と丁寧に一礼して去った。

< 壮烈な最後 >

4月21日、二人は刑場に送られた。刑場はロシア軍将兵の他、英米独仏等の観戦武官、各国従軍記者等、黒山の人で埋まっていた。二人が敵国の赤十字社に所持金全てを寄付したことが口伝てに広がり、二人の日本人に深い同情を禁じ得なかったのである。いよいよ銃殺の時が来た。ロシア兵たちは二人に深い感銘をおぼえていた。敵として殺したくない、、、との感情さえも芽生えていたのである。刑執行官シモノフ大尉は12名の射撃兵に「諸君よ！ この不幸な日本人勇士への同情は、その心臓を正しく狙うことのみである」と訴えた。ロシア兵が2本の柱に縛りつける為に近づいた時、二人は「縄は不用なり」と拒否し、ロシア兵が目隠しの布を取り出した時、横川はこれを押しとどめ最後の挨拶を行った。

「我々二人は天皇陛下の為に、ここに命を捧げ奉るのである。露国将兵諸君に向かつては厚く御礼を申すと共に、折角国家の為に努力せられんことを望む」

と述べ終った二人は共に、東南の空を望み、静かに、うやうやしく最期の拝礼を捧げた。終わって横川は白布を受け取り自ら目隠ししたが、沖は「自分が死ぬさまをこの眼でみて死にたい」と拒否し昂然と仁王立ちした。執行官シモノフ大尉は12名の射撃兵に対し、「射撃用意」と命じてから、少し声を落とし、「愛をもって」と言ってから「撃て!!」と叫んだ。畏敬すべき二人に対するせめてもの思いやりであった。横川三十九才、沖二十九才であった。

二人の行動はロシア側を精神的に恐怖させたばかりでなく、ロシア軍は東清鉄道保護の為、新たに数個師団を配備せざるを得ず、その分だけ主戦場の戦力を減少せしめることになったのである。あまつさえ横川・沖の両烈士の最後はその桜吹雪のかもしれない香気となって、ロシア兵の魂を激しく揺さぶり、日本武士道の壮烈無比の潔さと美しさを世界に示したのである。

明治にはこのような人物が無数に存在したのである。近代日本を興起させる礎となったのは、かくの如き人々であった。「西洋人はこの様な日本人の天皇に対する崇敬（すうけい）心を嘲笑的冷笑をもって受け取りがちだが、これは単に封建時代から伝わった礼式ではなく、全ては国民的特性であることを見落としている。それはまた日本民族の心に生き続ける、燦然（さんぜん）と輝く『忠節の念』そのものなのだ」、...とニューヨークの日刊新聞は伝えていた。この様な日本人の家族愛・郷土愛・祖国愛から生じた、他の為に命を捧げる気概と勇気と愛情は大東亜戦争では若者たちの特攻隊という形で表現された。

私達は彼等の命をかけて希求し、止まなかった「平和な世界」・「戦禍のない世界」のために己の国の運命を他国に委ねる恥ずべき精神を捨て去り、彼らが示し伝えた高貴な精神を取り戻し、散って行った彼等の希望を実現すべく努力をすべきであろう。

平成29年1月27日

志雲会塾長 有馬正能